

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

がんゲノム医療に携わる医師等の育成に資する研究

浜本 康夫・慶應義塾大学医学部 腫瘍センター・副センター長・専任講師

研究要旨

主としてがんゲノム医療中核拠点病院等以外に勤務し、がん診療に携わる医師等を対象にがんゲノム医療に携わる医師等が備えるべき知識や資質について検討した。また、身につけるための方策を検討の上、医師等を対象に、研修実施者の育成も念頭に置いた上で、研修の実施を準備した。がんゲノム医療に必須の知識を身につける際に求められる研修資料、教育プログラムの策定、モデル研修会の実施と評価法の策定を行った。

A. 研究目的

がんゲノム医療に携わる医師等が備えるべき知識や資質について検討し、そのような知識や資質等を身につけるための方策を検討の上、医師等を対象に、研修実施者の育成も念頭に置いた上で、モデル研修及び研修を実施し、評価を行うこと。主としてがんゲノム医療中核拠点病院等以外に勤務し、がん診療に携わる医師等を対象に、がんゲノム医療に必須の知識（がんゲノム医療に必要な用語の知識、遺伝子パネル検査の原理やレポートの理解、遺伝子パネル検査の活用方法、遺伝性腫瘍に関する知識等）を身につける際に求められる研修資料やe-learning及び研修プログラムの作成と研修の実施及び評価を行う。上記の研修の実施・評価の結果を踏まえて、研修資料、e-learning及び研修プログラムを改訂、完成させる。

B. 研究方法

- ①医師等が備えるべき知識や資質等を明らかにする。（2020年3月までに）
- ①-1. 関係者へのヒアリングを行う（2020年3月までに）。
- ①-2. ヒアリングの結果から課題を抽出する（2020年3月までに）。
- ②教育用プログラムの作成（2020年3月までに）。
- ②-1. 教育目標を設定する（2020年3月までに）。
- ②-2. ディプロマポリシーを設定する（2020年3月までに）。
- ②-3. 到達目標等を設定する（2020年3月までに）。
- ②-4. 教育用プログラム原案を策定する（2020年3月までに）。
- ②-5 分担研究者によるレビューを完了する（2020年3月までに）。
- ③ 研修用資料の作成（2019年10月までに）。
- ④ モデル研修会の実施、評価、研修用資料の改定（2021年3月までに）
- ④-1 モデル研修会の実施（2021年3月までに）

- ④-2 モデル研修会の評価（2021年3月までに）
- ④-3 研修用資料の改定（2021年3月までに）
- ⑤ 研修の実施（2021年12月までに）
- ⑥ 研修実施者の育成（2021年12月までに）
- ⑦ 研修実施者のビデオ撮影の公開（2022年3月までに）
- ⑧ 教育用コンテンツのブラッシュアップ（2022年3月までに）
- ⑨ 生涯教育への活用（2022年3月までに）
（倫理面への配慮）
該当せず。

C. 研究結果

- ①医師等が備えるべき知識や資質等を明らかにした。
- ①-1. 関係者へのヒアリングを行った。
複数名の関係者へのヒアリングを実施した。「達成済み」
- ①-2. ヒアリングの結果から課題を抽出した。
関係者へのヒアリングが終了したものについて、課題抽出を行った。「達成済み」
- ②教育用プログラムを作成した。「達成済み」
- ②-1. 教育目標を設定した（2020年3月までに）。
抽出した問題点等を踏まえ、教育目標を設定した。
がんゲノム医療中核拠点病院以外の拠点病院、連携病院等で、がんゲノム医療に従事する医師等が備えるべき知識や資質等を習得し、がんゲノム医療を患者に提供することを教育目標とした。「達成済み」
- ②-2. ディプロマポリシーを設定した（2020年3月までに）。
抽出した問題点等を踏まえ、ディプロマポリシーを設定した。
一般目標を達成するために必要な講義およびアクティブ・ラーニングの研修を受講し、その学習効果が到達目標に達したことを事後評価で客観的に検証した上で、研修を修了することを目指すことを

ディプロマポリシーとした。「達成済み」

②-3. 到達目標等を設定した(2020年3月までに)。

一般目標を「がんゲノム医療の実用化に必要な医療従事者として、遺伝子関連検査、患者・家族への伝え方、多職種との連携、意思決定支援等について必要な知識・態度・技術を習得する。」とした上で、下記の15項目を到達目標と定めた。

1. Pre-analysis段階における検体の品質管理の留意点を把握し、適切な病理検体を遺伝子パネル検査用に提出することができる。
2. 遺伝子パネル検査の特徴を説明できる。
3. 遺伝子パネル検査にかかわる遺伝学的及び分子生物学的用語が理解できる。
4. 遺伝子パネル検査の同意説明時に、遺伝子パネルのメリット・デメリットについて適切に説明ができる。
5. エキスパートパネルに参加し、主治医としての役割を果たし協同することができる。
6. エキスパートパネルのレポートの内容を理解、説明できる。
7. エキスパートパネルのレポートに基づき、結果を患者に簡潔に説明できる。
8. エキスパートパネルのレポートに基づき生じる問題について多職種との連携を含めた問題解決能力を発揮できる。
9. 遺伝子異常のエビデンスレベルについて概略を説明できる。
10. がんゲノム医療に関するガイダンス等の指針について説明することができる。
11. 意思決定支援を行うための患者申出療養、治験について説明できる。
12. 生殖細胞系列変異と体細胞変異の違いを説明できる。
13. 二次的所見に関して説明し、次のとるべきアクションを説明できる。
14. 遺伝子パネル検査の説明に必要な薬物療法等に関わる知識として、対象がん種の診療ガイドラインを理解する。
15. C-CATレポートを参照することができる。

「達成済み」

②-4. 教育用プログラム骨子案を策定した(2020年3月までに)。

教育用プログラム原案を策定した。「達成済み」

②-5 分担研究者によるレビューを完了した(2020年3月までに)。

教育用プログラム原案を分担研究者、研究協力

者によるレビューを実施した。主に到達目標に関する項目の追加、変更について議論し、改定した。

「達成済み」

③ 研修用資料を作成した(2019年10月までに)。

教育用プログラム原案を基に研修用資料を作成に取り掛かった。また、研修用資料作成にあたり、モデル研修会の構成および評価法の検討を行い、同内容を踏まえた研修用資料作成を行った。その際、研修会の実施時期を2020年3月と定め、本年度内の研修会の実施を計画した上で、研修用資料の作成等の準備を行った。COVID-19の影響により3月の研修会の実施は中止した。「達成済み」

④ 本研究用のウェブサイト

(<https://ca-genome-edu.jp/>)を開設し、研修の

ための教育プログラムを公開した(資料1)。

⑤ モデル研修会の実施と教育効果の評価を行った。[達成済み(令和2年8月)]

モデル研修会を2020年8月16日、WEB開催した。参加申し込み:563名申込分まで受け付け(定員400名)、参加予定者480名、参加者(最終log確認値)401名(関係者を含め418名)であった。事前事後問題結果を用い教育効果の評価を行った。事前事後問題の解答率の中央値は事前問題3/9、事後問題4/9($p < 0.0001$, paired t-test)であり、教育効果が示された(資料2)。アンケート調査結果を基に、課題抽出を行った(資料2)。

⑥ 研修用資料の改定を行う。

令和2年8月16日に小班会議を行い、改定の方法について議論した(資料3)。議論に基づき、モデル研修会の評価、アンケート結果を活用し、研修用資料の改定を行っている。著作権侵害防止に関しては、関係者(弁護士)の意見を伺い、その助言に基づき改定作業を行っている。

⑦ 研修実施者の育成を行う。[達成見込み(令和3年12月)]

研修実施予定者として、ワーキンググループ(資料4)を結成した。モデル講習会にファシリテーターとして参加した。次年度の研修実施に向けて事例作成、講義資料の活用をすすめ、研修実施者の育成を図っている。

研究成果の刊行に関する一覧表:なし。

研究成果による知的財産権の出願・取得状況:知的財産の内容、種類、番号、出願年月日、取得年月日、権利者:なし

D. 考察

モデル研修会を2020年8月16日、WEB開催した。参加申し込みが500名を超える応募があり、アンケート調査でも、WEB希望が多く、今後の研修会・講習会の在り方にWEB開催を念頭におくことが必要であると考えられた。

本研究事業において作成した教育用コンテンツ

を用い、ワーキンググループによる研修会を実施し、その教育効果を評価することなどにより、指導者の育成を行うと共に、全ゲノム解析研究の進展等に対応する教育コンテンツのより一層の充実を図る。これらを生涯学習への活用に向けた取り組みに繋げる。

E. 結論

医師等を対象に、モデル研修及び研修を実施し、評価を行った。

主としてがんゲノム医療中核拠点病院等以外に勤務し、がん診療に携わる医師等を対象に、がんゲノム医療に必須の知識（がんゲノム医療に必要な用語の知識、遺伝子パネル検査の原理やレポートの理解、遺伝子パネル検査の活用方法、遺伝性腫瘍に関する知識等）を身につける際に求められる研修資料やe-learning及び研修プログラムの作成と研修の実施及び評価を行う。

研修実施者の育成も念頭に置いて、ワーキンググループを結成し、活動を開始した。

F. 健康危険情報

該当せず

G. 研究発表

1. 論文発表

Shimozaki K, Sukawa Y, Beppu N, Kurihara I, Suzuki S, Mizuno R, Funakoshi T, Ikemura S, Tsugaru K, Togasaki K, Kawasaki K, Hirata K, Hayashi H, Hamamoto Y, Takaishi H, Kanai T. Multiple Immune-Related Adverse Events and Anti-Tumor Efficacy: Real-World Data on Various Solid Tumors. *Cancer Manag Res*. 12:4585-4593. 2020.

Hirata K, Hamamoto Y, Ando M, Imamura CK, Yoshimura K, Yamazaki K, Hironaka S, Muro K. Weekly paclitaxel plus ramucirumab versus weekly nab-paclitaxel plus ramucirumab for unresectable advanced or recurrent gastric cancer with peritoneal dissemination refractory to first-line therapy—the P-SELECT trial (WJOG10617 G)—a randomised phase II trial by the West Japan Oncology Group. *BMC Cancer*. 20(1):548. 2020.

Hayashi Y, Hosoe N, Takabayashi K, Limpasakamiya KJL, Tsugaru K, Shimozaki K, Hirata K, Fukuhara K, Fukuhara S, Mutaguchi M, Sujino T, Sukawa Y, Hamamoto Y, Naganuma M, Takaishi H, Shimoda M, Ogata H, Kanai T. Clinical, Endoscopic, and Pathological Characteristics of Im-

mune Checkpoint Inhibitor-Induced Gastroenterocolitis. *Dig Dis Sci*. doi: 10.1007/s10620-020-06441-w. 2020.

Matsuda S, Kawakubo H, Okamura A, Takahashi K, Toihata T, Takemura R, Mayanagi S, Hirata K, Irino T, Hamamoto Y, Takeuchi H, Watanabe M, Kitagawa Y. Distribution of Residual Disease and Recurrence Patterns in Pathological Responders After Neoadjuvant Chemotherapy for Esophageal Squamous Cell Carcinoma. *Ann Surg*. 2020.

2. 学会発表

千田 彰彦, 川崎 健太, 櫻井 陽奈子, 堀江 沙良, 津軽 開, 戸ヶ崎 和博, 下寄 啓太郎, 平田 賢郎, 林 秀幸, 浜本 康夫, 河原 徹, 牧内 里美, 岩原 彰秀, 川合 未来, 杉山 和俊, 目黒 周, 金井 隆典, イマチニブ休薬による急性増悪を背景にNICTHを合併した胃GIST術後再発の1例. (第363回日本消化器病学会関東支部例会, 2021.02)

千田彰彦, 下寄啓太郎, 堀江沙良, 津軽開, 戸ヶ崎和博, 川崎健太, 平田賢郎, 林秀幸, 浜本 康夫, 金井隆典, 消化管における免疫関連副作用(irAE)の現況と対策 多癌腫におけるirAE腸炎の発生状況とその治療 当院における現況をふまえて. (第17回日本消化管学会総会学術集会, 2021.2)

持田かおり, 林秀幸, 佐々木瑛里, 柳田絵美衣, 山田寛, 中村康平, 加藤容崇, 四十物絵理子, 永妻晶子, 今井光穂, 植木有紗, 浜本 康夫, 高石官均, 西原広史, がんゲノム医療におけるチーム医療の実績 がんゲノム医療中核拠点病院におけるゲノムコーディネーターの役割とみえてきた今後の課題について 慶應義塾大学におけるがんゲノムコーディネーターとしての役割. (日本臨床腫瘍薬学会学術大会 2020, 2020.3)

林秀幸, 浜本 康夫, 高石官均, 消化器癌化学療法における個別化医療の現状と課題 膵がん個別化医療の現状と課題. (第106回日本消化器病学会, 2020.8)

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む。)

1. 特許取得
なし

2. 実用新案登録
なし

3. その他
なし